

福田 一志君を偲ぶ

安 楽 勉

ここは壱岐の島，原の辻遺跡を見下ろす丘の上に平成22年3月14日に開館した壱岐市立一支国博物館・長崎県埋蔵文化財センターがある。わたしの勤務する東アジア考古学研究室に入ると，本棚の上段に置かれた写真がいつも迎えてくれる。ビールをうまそうに飲んでいる福田君の笑顔である。

しかし，残念ながら今は彼に会うことはかなわない。その突然の訃報を知ったのは，地元の皆さんが原の辻遺跡を盛り上げようと計画された「原の辻やよい祭り」の最中であった。やや痩せ型で健康にはなにひとつ不安もないような，我々のように，日々病気と向かい合って生活している者からすると羨ましい存在であったから，あの若さで亡くなったことは衝撃的でもあった。

福田君は大学の後輩という気安さもありいろんなことを話す間柄でもあったが，また明るい人柄から，どこの発掘調査に行っても作業員さんからも慕われたものである。なかでも一番長い調査となったのは原の辻遺跡の調査である。平成7年に原の辻遺跡調査事務所が設置されて以来，壱岐が勤務地となったため福田君は平成14年から調査事務所勤務となり，原の辻遺跡の調査に従事することになったが，特筆することは，かねてから懸案であった原の辻遺跡の総集編を主担当となり，平成17年に刊行してくれたことである。この仕事は執筆者が多かったこともあり困難な作業であったが，内容は今もって高く評価されている。

彼の得意分野は旧石器時代であったので，石器の実測図は正確丁寧との定評があり，私の図と比べると雲泥の差があった。総集編でも石器を担当してもらったので改めて見直すと，弥生時代の石器であっても十分に納得させるものがあり，このことは，他の遺跡の報告書を見ても同じである。

福田君と従事した印象に残った現場を振り返ってみると，昭和55年原の辻遺跡丘陵部の緊急調査の際には1月という寒風の中を黙々と調査にいそしみ，夜の食事時がにぎわったことが思い出される。また，長崎県遺跡地図作成に伴う対馬の調査では，地元の人でも迷うといわれた複雑な浅茅湾の岬の突端に所在する遺跡は船を使ってすべてまわり確認したことは大きな成果で，今でも評価されている。

平成18年4月には本庁の学芸文化課に異動となり，現場に出ることはほとんどなくなり事務的な仕事が増えていったが，そこでもかなりの頑張りを見せていたらしい。しかし，平成22年壱岐に県立埋蔵文化財センターが設立される予定の中で，彼は埋蔵文化財センターでの仕事を希望していたと奥様からお聞きした。亡くなった半年後の3月14日に建物は完成したのであるが，彼の意がかなわず本当に残念でならない。

最初に書いた福田君の笑顔が見守っていると
いった理由は，そんな彼の生前の気持ちをおもん
ばかってか，奥様は子供さんと一緒に新しいセン
ターを訪問され，川久保前所長に写真を託されて，
さらに私が受け継いだ次第である。

埋蔵文化財センターの仕事はまだ緒についたばかりである。

我々の仕事に難問が立ちふさがると思うが，前途を暖かく導いてほしいと心から願うものである。

【空から見た埋蔵文化財センターと原の辻遺跡】

